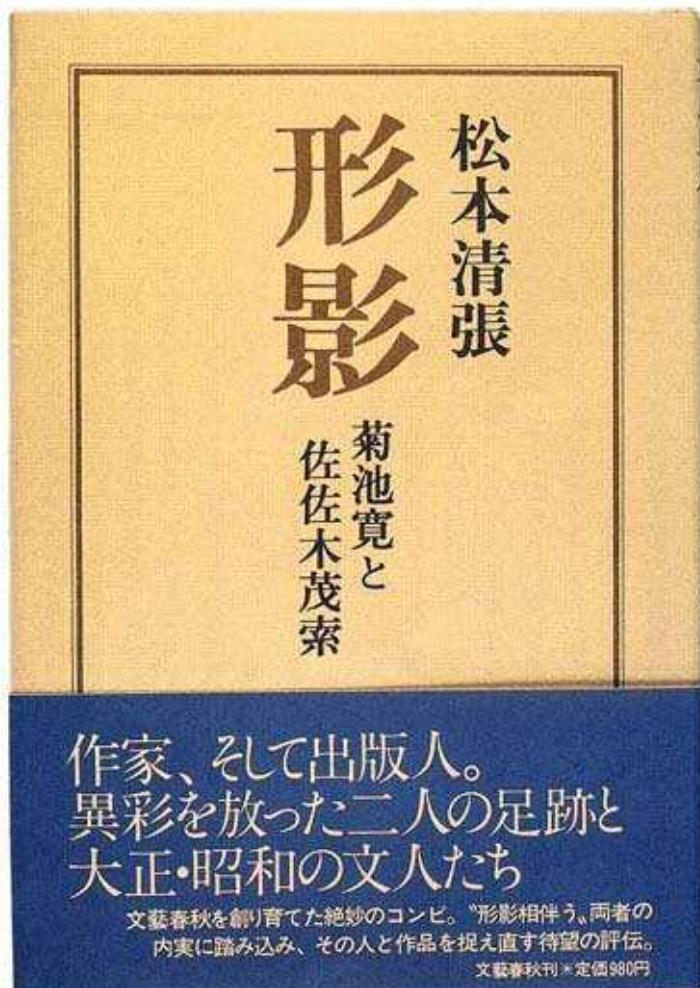


# 松本清張記念館

◆館報◆  
2003.8  
第13号

## 「形影相伴う」の 理想形になつた



現在入手できる本  
「形影 菊池寛と佐佐木茂索」(文春文庫・文藝春秋)  
松本清張全集 第64巻(文藝春秋)

昭和57年10月 初版  
文藝春秋刊

### 作品紹介

「形影」とは、菊池寛と佐佐木茂索の名コンビを指している。名コンビと言つても、それは全く才能の違う二人がいることで、結果的に成功したという意味だつた。

作家としての素質も互いに相容れない同士であつたのに、社内で派閥がでたり、対立、抗争がなかつたことを、清張は「両人とも文士の文士たる所以である」と評している。

もともと清張は菊池寛に敬愛の念を持つてゐた。少年時代から憧れの作家であり、生い立ちや、経験からくる人生観、作家としての姿勢には共通するものがあつた。冒頭で語られてゐるよう、はじめは「菊池寛小論を書く」ことが、「この作品の主眼であった。しかし、対照的な茂索という文藝春秋のパートナーを描くことにより、寛を照らし出す鏡となつた。作家としての評価は、数多くの名作を残した文壇の大御所・寛に軍配が上がるが、文藝春秋を継ぎ、社員を守つた茂索の功績も大きい。いち早く奥様ボーナスを支給したのも茂索ならではの粋な計らいであつた。寛は、自分宛に礼状が来て初めて知つたといふ。「菊池の死後、その徳をたたへてこの事を書いた旧社員も二三ならずゐた。誰もわたしが独断でした事は知つてゐない。(中略)かういふ連中が私を冷たい男と書き、且つ今もそう思つてゐるのである」と、あるとき茂索はメモに記している。寛が表ならない両輪であつたことは、間違ひないだろう。

(学芸担当 柳原 啓子)

目次	
● インタビュー 清張を語る	
● 清張さんとわたし 安田 滉	2
● 特別企画展「松本清張と菊池寛」展	4
● 満張原風景 点描「火ノ山」	4
● みんなの広場	5
● 探検 清張記念館	6
● ドリックス	7
● 友の会活動報告	7
● 秋吉茂氏を悼む	6
● 展示品紹介	5

# 清張さんとわたし

作家・安田満さんは、清張の朝日新聞西部本社時代の同僚です。

小説を書き始めた頃の清張をよく知る安田さんに、当時の想い出などをうかがいました。

2003年6月17日(火) 戸畠区中原 安田さん宅にて 聞き手:中野吉明・小野芳美

安田さんは、昭和十七年朝日新聞西部本社に入社されて、翌年すぐにジャワ新聞に、とお聞きしていますが、清張との出会いはいつ頃なのでしょうか?

昭和十五年頃、私が参加していた鹿児島の俳句結社「キリシマ」が、俳句弾圧に遭いました。それと関係があるのでしょうか、入社後ほどなく陸軍報道員としてジャワに派遣されました。入社してすぐ、上司で「層雲」同人の浜口矢十(本名:彌十郎)さんに誘われて、社内の「朝日厚生俳句会」に参加しました。編集局があつた二階の和室で行われていました。そこで清張さんと初めて会いましたが、この時は顔を合わせたという程度でした。句会は戦後復活ましたが、清張さんはみえませんでした。

社ではその後昭和二十五年頃に有志が集まり、今の北九州市立大学の英語の先生を招いて勉強会をしていましたが、そこにも清張さんは出席していました。とにかく知識欲の旺盛な人でしたね。

安田さんに「或る『小倉日記』伝」を読み聞かせて、感想を求められたそうですが:

私は「九州文学」創刊時からの同人で、時々小説を書いていました。火野葦平さんらも参加していた当時の「九州文学」は、東京で発行されている雑誌と同じくらい有名で、地方のいち同人誌以

上のものでした。私は小説を書いていることを特に社内で言つたことはなかったのですが、清張さんは誌上で私の名前を目にしていたのでしよう。ある朝出勤すると、玄関で私を待っていました。私はそのころ出勤時間がまちまちだったので、清張さんは時間を調べて待っていてくれていて。「或る『小倉日記』伝」の草稿を読んで感想を聞かせてほしいということでした。私も知っている実際の人物が何人もモデルになっているので、興味深かったです。

「半生の記」にも、「或る『小倉日記』伝」を同僚に聞いて貰つた、とありますね

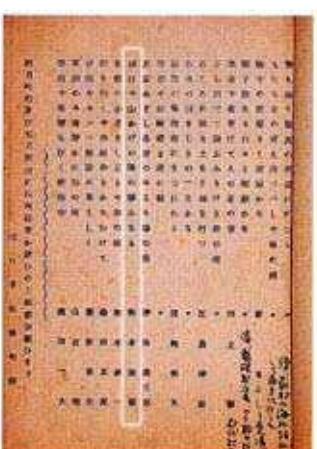
社の前の電車通りを挟んだ空き地で

古電柱に腰掛けて、清張さんが情感をこめ、抑揚をつけて読むのを聞いていました。だから聞き役になるのを迷惑がつた覚えはないですが、「半生の記」には同僚は「遂に迷惑がつた」と書かれています。昭和三十六年の夏から秋頃でした。原稿が一段落した後、清張さんは私を自宅に招いて奥様の手料理でもなしてくれました。

翌年、「或る『小倉日記』伝」が「三田文学」に載った頃、私は東京本社に転勤していました。「三田文学」の水曜会に直方出身の作家野田開作さんと参加しました。和田芳恵さんはこの夜のことを

戰前、「九州詩集」で顔を合わせていました。昭和十二年の「九州詩集」第三集の出版記念会では一緒に写った写真があります。体はあまり不自由という印象はありませんでした。いつも和服姿の方でした。同人には阿南哲朗さんもいました。田上さんは田上さんとは面識がなく、のちに阿南さんから聞いて話を書いたのではないでしょうか。現実の田上さんを清張さんが知らなかつたことが想像力をふくら

朝日厚生俳句会会誌(安田満さん所蔵)  
昭和十八年開催の句会のもの  
清張の句「煙打や山かけの陽の静がなる」  
が掲載されている





## 安田 満(やすだ みつる)

作家。  
大正4年生まれ。  
元朝日新聞記者。  
在職中から執筆活動も行う。  
著書に『玄耳と猫と漱石』『多佳子幻影』、  
詩集『返春』などがある。



「作品関係で他に印象に残っているのは?」  
よくいろいろな相談を受けましたね。江藤新平関係の資料について聞かれたことを覚えています。佐賀県立図書館に「新平伝」があるというと、次の休みにすぐ行って見てきたようでした。この時の取材は「皇室抄」に実ったのでしょ。私が当時の持っていた隠れキリシタン関係の本も、書棚から出して熱心に読んでいました。これは作品にはないようですね。清張さんは借りた本は必ず返す人でした。

（仲がよかつたんですね）

風邪で二週間くらい社を休んだ時、同僚が見舞いに来ない中、清張さんだけは当時高価だったサントリーのタスキ瓶を提げて来てくれました。私が酒を飲まないことを知っているのに、「体をぬくめたら回復が早いよ」と感激しましたよ。

（上京の相談もつけられたとか？）

東京に行くということは、腹の中では早くから決めていたのでしょうか、「どうだろうかと聞かれました。ほかの方にも

ませることにつながり、よかつたのだと思っています。全体を四、五回は聞きました。私が駄目を出しても、彼は素直に書き直していましたね。

相談されていたんですね。私は「東京に行つたら苦労があるぞ。でも、行ってみろ、いちばんかだ」と勧めました。

作家になりたいという気もちはあったのでしょうか、そうは言いませんでした。でもその後、本を出すことに「三冊ずつ必ず送つてくれました。ところが「西郷札」が届いたとき、署名が「吉田満様」となっていました。出版社の担当の人があなたの際、私と朝日新聞の吉田さんの宛名を間違えたのだと気づいたのはかなり後のことです。当時は吉田さんという人がいたことを知らず、私の名前を間違えたのかと思い、この時だけは礼状を出しませんでした。それからだんだん疎遠になってしまいました。

（清張は小倉時代、考古学にも関心があつたと「半生の記」に書いています）

（最後に面白い想い出話をなにか）

昭和二十六年頃でしたか、私の家で清張さんと友人で福岡の作家の中村光至君と三人で食事をしたとき、女房がビーマンの肉詰めを出したんですね。私が席を外した隙に、ビーマンを指して中村君に「これは何か」と尋ねたと。

（ビーマンはまだ珍しかつたんでしょうね（笑））

私が言うと、嫌みにとられるかなと思つていたんですが、生前中村君が書いたやつたから、今日はお話ししますね。やつぱり嫌みかなあ。（笑）

考古学を勉強し大切にしていた本を、清張さんは逆譲別に私に贈ってくれました。今でも手許に残しています。

（安田さんは小説「多佳子幻影」に、俳人、橋本多佳子さんの想い出を描かれて

いますね）

（「九州詩集」一戦前には四回発行された。九州出身者、在住者を中心執筆された。第三集には五十六人が参加した。）

（「阿南哲朗」一明治三十六年（昭和五十四年）童話作家、詩人。小倉到津遊園園長を務めたかたわら、北九州地方の児童文学運動に力を入れた。童話集「よるの動物園」には、清張が序文を書いた。）

# 「松本清張と菊池寛」展

## ～どこか似ている文士の面影～

今回の企画展では、どこか似ている二人の作家という視点から、清張が敬愛してやまなかつた作家、菊池寛との関わりについてご紹介します。

### 【菊池寛が遺したもの】

菊池寛は、その作品だけでなく、「文藝春秋」の創刊や「芥川賞・直木賞」の創設、作家の自立をめざした日本文藝家協会の設立などにより、文壇の大御所と呼ばされました。現在の文学界の基礎を作りあげた菊池寛が遺したものを見ます。

### 【寛から清張へ】

少年時代、菊池寛と芥川龍之介を愛読した清張、しかし清張は芥川よりも寛を「わたしの古典」に挙げています。そして自ら影響を受けたと明言する唯一といつていい作家が寛なのです。

癖やしぐさまで似ていたといわれる二人の文士の面影を紹介します。

### 【展示のみどころ】

今回の企画展では、寛の中学時代の習作や、英語で書かれた手紙や論文、愛用の将棋駒などの初公開資料をご覧いただけます。また、これまで聞くことのできなかった寛の肉声も聞くことができます。ご期待ください。

■平成15年8月4日(月)～  
10月31日(金)

■松本清張記念館  
企画展示室



「文藝春秋」創刊号



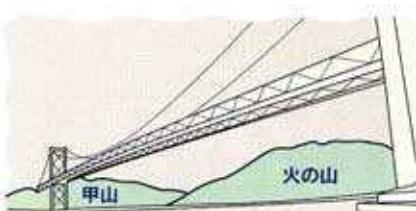
「形影 菊池寛と佐佐木茂栄」の原稿と創作ノート



菊池寛の馬主服  
(複製)



門司・和布刈側からみた火の山と甲山



思われる。  
で起こったと  
つて、甲山の西側に  
側結節点とな  
位置し、今日  
関門橋の下関  
の山の西側に  
は、実は火  
滅させた山崩  
は、実は火  
清張の住んだ  
旧壇ノ浦を全  
検討すると、

この文章や古い地図なども参考に種々  
園の斜め前には落石防止の設備があるが、  
そこが旧壇ノ浦を全滅させた山崩れの箇  
所であった。(「骨壺の風景」)  
この文章や古い地図なども参考に種々  
園の斜め前には落石防止の設備があるが、  
そこが旧壇ノ浦を全滅させた山崩れの箇  
所であった。(「骨壺の風景」)  
この文章や古い地図なども参考に種々  
園の斜め前には落石防止の設備があるが、  
そこが旧壇ノ浦を全滅させた山崩れの箇  
所であった。(「骨壺の風景」)

### 清張原風景

# 点描

### 火ノ山

「火ノ山の崖崩れは、夜中に突然やつて  
きた。表戸の雨戸を破つて餅の店を土砂  
で埋め、奥に寝ている四人の枕元へ木を付  
けた土と岩が押しよせた。母は私を背中  
に縛りつけ、その母の手を父が引張り、祖  
母がうしろから押して、間に屋根伝いに  
逃げた。せまい屋根のすぐ下は海だった。  
— 山崩れは、道路拡張工事のダイナマイト爆破作業が原因だったという。」(「骨壺の風景」)

標高二百六十八メートルの火の山は交  
通の要衝・関門海峡の東側入り口に位置  
し、その名は古代、都との連絡のために  
ろし場が置かれたことに由来する。

戦国時代、大内氏により城が築かれ、九  
州の大名との合戦の攻防拠点となつた。  
明治二十三年(一八九〇)、下関に要塞砲大  
隊が設置されると山頂に砲台が築かれ、  
市民の立ち入りはいつさい禁止された。戦  
後、昭和三十一年には瀬戸内海国立公園の  
一部に指定され、今日、関門海峡を間近に  
望む観光地としてにぎわつている。

「御櫻川橋は朱塗りの欄干になつてゐる  
が、その袂のあたりの小公園が、ほぼ七十  
年前には、八軒ばかりの家が長府街道に  
列にならび、旧壇ノ浦の東端だった。そこか  
ら西へ三十メートル寄つて道路がわずかに  
カーブする。そのあたりが西端であった。小公  
園の斜め前には落石防止の設備があるが、  
旧壇ノ浦はまことに短い集落だった。小公  
園の斜め前には落石防止の設備があるが、  
そこが旧壇ノ浦を全滅させた山崩れの箇  
所であった。(「骨壺の風景」)

# みんなの広場

今回は、最近お寄せいただいたアンケートの中から、皆さんのお寄せいただいた感想や作品に対する思いを掲載しました。清張作品は、読み終わった後にさまざまな思い・感想がこみ上げてくる作品が多いですよね。掲載された感想に共感される方もいらっしゃれば、また違ったご意見・ご感想を持たれた方もおられるかと思います。

さて、あなたはどう思われます?

- ・「或る『小倉日記』伝」—高校生のときに読んだが、ただの推理作家だというイメージを碎かれた衝撃は大きかった。  
(30代・山口・男)

- ・「砂の器」—親子の愛情、どうしようもない自我欲。何度も涙を流す、大好きな一冊です。  
(50代・住所不明・女)

- ・「砂の器」—多くの作品の中で一番好きな作品。人間の持つ、悲哀、弱さ、そして温かさ、強さがそれぞれの人間像に示されている。もう少し長生きして、今日の日本の問題、アメリカのテロ事件、最近の北朝鮮との問題も書いてほしかった。  
(70代・東京・女)

- ・「陸行水行」—邪馬台国はどこか?素人にも興味ある事柄を推理し、旅する内容が好きだ。  
(60代・神奈川・男)

- ・「遠くからの声」—社会派といわれる清張の文学的な面がおしゃれで、おもしろい。  
(20代・広島・女)

- ・「ガラスの城」—人間の心理、感情が非常によく書かれていて好きです。  
(30代・神奈川・男)

- ・「点と線」—中学生のとき初めて読んだのですが、ぐいぐいと引き込まれて一日で読み終えました。  
(10代・北九州市・男)

- ・「点と線」—どこを読んでも、どの登場人物も清張さんのキャラクターを表している。  
(30代・東京・男)

- ・「剥製」—読んだ後、色々考えさせられるので好きです。  
(20代・神奈川・女)

- ・「鬼畜」—人間の本質が見えてくる。  
(50代・福岡・男)

このコーナーでは、アンケートなどお寄せいただいた意見等を紹介しております。清張や作品に対する思い、エピソードなど何でも結構です。皆さんの「声」を是非、記念館までお寄せください。

\*アンケートは館内にも置いてあります。

## 友の会活動報告

### ●第3回 清張サロン(平成15年4月18日(金): 参加者14名)

今回取り上げた作品は「ゼロの焦点」。皆さんお馴染みの作品ということもあり、参加者からは、作品の舞台となった能登を訪問した時のエピソードが紹介されるなど、数多くの意見・感想が出されました。昨年9月にスタートした清張サロンも今が3回目。参加者もサロンの雰囲気に慣れてきたようで、終始活発な意見交換がなされました。

平成15年度も、引き続き清張サロンを実施していく予定です。



### ●残念(?) 日田文学散歩が延期に…

5月31日(土)に予定されていた文学散歩は、目的地である日田方面の悪天候(台風)により開催を断念しました。

参加者、事務局ともに楽しみにしていただけに、大変残念な結果になってしまいました。

今回の日田方面文学散歩については、次年度(15年度)に延期して、開催する予定です。

日程等詳細が決まり次第、会員の方には改めてご案内をいたします。

### ●友の会会員募集!!

ただいま友の会では新規会員を募集中です。松本清張記念館友の会では清張ゆかりの地の見学や読書会・講演会等の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。

会費は、8月から翌年7月までの1年間で会費は3000円となっております。



#### ■友の会事業

- ・講演会、シンポジウム等の開催
- ・読書会、文芸講座等の開催
- ・映画ビデオ等の上映会の開催
- ・会報の発行
- ・松本清張ゆかりの地、他都市の文学館見学事業の実施 など

#### ■会員の特典

- ・常設展の招待券(年間4枚)進呈
- ・企画展(年2回)のご招待
- ・記念館主催事業のご案内
- ・記念館広報誌(館報)・企画展図録進呈
- ・友の会主催事業のご案内、会報の進呈
- ・友の会オリジナルグッズ(ペーパーウエイト)の進呈(加入年度のみ)
- ・喫茶「石の館」(記念館内)の飲食料金1割引

会員募集中! 友の会入会のお申し込みは…

TEL. 093(582)2761 松本清張記念館友の会事務局まで

# 秋吉茂氏

## を悼む

### 獨行道を貫いた達人・松本清張



記念館前での秋吉氏ご夫妻(平成14年4月)

朝日新聞社に勤め、松本清張と深い親交のあった秋吉茂氏が平成十五年四月亡くなられました。朝日新聞西部本社時代に、田上耕作の法要の記事を書いた秋吉氏に清張が「小説にしたい」と相談におもむいたのが、「或る『小倉日記』伝」誕生のきっかけとなつたといわれています。

また秋吉氏は東京本社勤務時代に、清張から「黒い画集」直筆原稿を贈られています。この「黒い画集」直筆原稿は、秋吉氏の「記念館に納まるのがベスト」という格別の厚意により、平成十三年十二月手すから棚包のうえ、寄託いただいています。

秋吉茂氏の冥福をお祈りするとともに在りし日の姿を偲んで、昨年四月、清張記念館友の会会員らを行なわれた講演を紹介いたします。



友の会会員らの前で講演する在りし日の秋吉氏

剣豪・宮本武蔵は、その晩年を過ごした熊本地で、「獨行道」を著しました。「獨行道」は、兵法の道を極めるための自戒の著です。今日は「獨行道を貫いた達人・松本清張」と題して、お話をさせていただきます。

清張さんが朝日新聞社に入社したる、職員は社員、準社員、雇員などに区分され、その序列化は明確でした。学歴のない清張さんは「の実社会の中で、自分は「歯車のねじにも値しない」(「半生の記」といつています)。将棋をよく指してましたが、自分の肩書きを忘れて実力を存分に發揮できたのは、将棋盤のうえぐらいたかも知れません。

芥川賞を受賞してからも、社内における清張さんの評価は変わりませんでした。芥川賞を受賞した昭和二十八年の十一月、希望して東京本社に転勤します。丁度その時、私は「李承晚ライン」の取材で長期出張をしていました。取材から帰つて来ると「いろいろと世話になった」という内容の置き手紙が机の上にありました。

昭和二十九年、私は国会取材の名目で二ヶ月間東京に出張しました。清張さんは、そのときまだ妻子を小倉に残し、ひとりで戚家の家に居候していた時期だったと記憶しています。その間、毎週末になると、清張さんとよく新宿あたりの安い飲み屋に出かけたものです。

「今の職場にはなかなか馴染めず、息が詰まりそうだ。変わらんじやなかつた」とこぼしたこともありました。そして最後には「今のままで自分の将来もしれている。思い切つて退社し作家生活に入ろうと思うがどうか」という相談を受けました。

今日、芥川賞、直木賞を受賞すれば作家として脚光を浴びますが、当時はまだそういう状況ではありませんでした。週刊誌も「週刊朝日」と「サンデー毎日」があるくらいで、原稿料で生活できるのはほんの一部の作家にすぎませんでした。(「パンは一本、箸は二本」といって、印税で後でした。そのとき受け取った退社の挨拶には、「小生に

とう、いよいよ背水の陣です。これからもよろしく頼ります」と書き添えてありました。

私は昭和二十五年東京本社に転勤し、それからまた清張さんとの交流が復活、再開します。丁度週刊誌ブームとなつていていた頃で、作家は引っ張りだく、清張さんも躍進作家となっていました。今度は銀座の高級バーに案内してくれました。数年前、新宿の安酒場で進退に窮りましたところは全く違っていました。高級バーではなく「自分の弟だ」と私を紹介していました。どこか泥臭く、九州なまりがとれなかつたから、本当にそう思っていた人も多くいました。

私は、清張さんから一枚の色紙を送られました。一枚は私の似顔絵ですが、もう一枚には「我が道は行方もしれず、霧のなか」と書いてありました。そこには大作家となつても苦悶する清張さんがいました。



働き過ぎが気になり、少し休むことも勧めましたが、「自分は大作家とは思っていない。今ちやはやされていてもいつ蹴飛ばされるかわからない。自分は不器用でほかに出来ないから、精一杯書いている毎日が真剣勝負なんだ。体もわけにはいかない」といました。

その時、清張さんはペンをもつた武蔵だと思いました。すべてをかなぐりすべてひとつ道に邁進する作家清張さんは、まさしくわき日もふらず剣の道に邁進した武蔵という気がしてならないのです。

昭和四十三年、お互いの多忙と此細などから疎遠となつてしまい、そのまま清張さんが亡くなるまで会うことはありませんでした。

青山葬儀所での「おわかれ会」で奥さんに「会いたがつていましたよ」と声をかけられたことが、いま無念でなりません。

- 著書に「美女とネズミ」と「神々の島」(昭和四十年第十三回日本エッセイスト・クラブ賞受賞)、「駅弁の町」「遙かなり流砂の大陸」などがある。
- 松本清張のほか、海音寺潮五郎、子母澤實などの作家とも親交があつた。

古代史カード

のカードで、巧に写し取った絵図が目を惹きます。日本史と東洋史に分けて索引も作っていました。それは「流書メモ索引」として「作家の手帖」(昭和五十六年文藝春秋刊)に収録されています。

欠番もありますが索引には、日本史八十六件、東洋史百三十件が整理されています。項目を見てすぐに気づくのが、「魏志倭人伝」を含め「邪馬台国」関係のカードが意外なほど少ないことです。

「邪馬台国」は、清張が古代史研究で最初に取り組み「古代史要」(昭和四十四年)で、日本史関係では仏教、特に密教や護摩の起源、バラモン教などに関する抜き書きが目につき、東洋史関係では西域と仏教美術、ゾロアスター教を中心とした古代ペルシアなどが大半を占めます。

読まれた方は、古代飛鳥へのイラク・ゾ

が備忘のため、研究書の「一部分を書き抜き、要約を付し、書名と該当ページをつづけ」「感想も付した」(別冊文藝春秋「七〇号 昭和六十年二月」直筆の読書カードが展示されています。四つに分けた東の番上は、「奈良時代の文化圏」「竹原古墳の駆け」「筒形銅器と平形銅劍」「アケメネスペルシア金貼銀製盆・銅鼓の文様



ロアスター教徒の渡来を推測した「火の路」(昭和四十八年四十九朝日新聞)や、京都長安と天平の奈良を舞台にした「弦人」(昭和五十一~五十五年中央公論)を思い出させられるでしょう。索引は昭和五十六年当時のもので、「遅まきながら(じつき)も、ひとつ早くやればよかつた」(こういうカードをつくれた)「作家の手帖」ともあるので

灯台下暗し。何とのカード作りを直伝した当人が藤井館長だったのです。「このごろ記憶力が衰えてきた」との話がきっかけだそうです。清張が六十代後半のこととで、おそらく「駭人」の連載中の頃だと思われます。カードは「コクヨの補助簿13穴」。自分も使っており、全国どこでも買えるとの理由から、館長はこれを勧めたそうです。横書き用を、清張は自分流に縦書きで使っています。たまると、「ほらこんなに」と嬉しそうに、カードの箱（ケーキキの空き箱）を見せたそうです。

# きよしとハルコの 探検！清張記念館

#### 1F “記念館オリジナル映像「点と線」”の巻

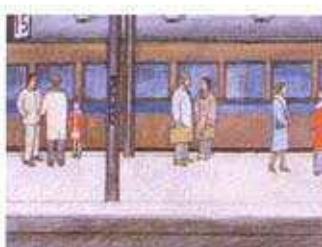


11/2

いやー、1時間があつという間だったわね。  
小説やドラマとはまた違った独特の雰囲気でよかったです。

七

風間完さんの絵  
が話のテンポに  
よくマッチして、イ  
メージの押し付け  
にならないところ  
がいい。  
こういう作品は、  
声優の演技も見  
どころだね



東京駅15番ホームに立つ伊山とお隣

八四

昭和30年代の日本を描ききった、ベテランの仕事が光るわね。でもストーリーそのものは古さを感じない。やっぱりこの作品が、時代をこえた人間の「業」によって巧みに構築されているからなんでしょうね。  
さすが清張!

ハルコ そういえば偶然見たんだけど、きのう駅で一緒にいた女の一人って誰?

**きよし** さあね。僕って意外とモテるから…。  
あれ、もしやって妬いてる? ううう。

**ハルコ** でも、そのあと一人でコンビニ弁当食べてたから、  
ないしょした問題ではなさそう上む。

**きよし** 鳥飼刑事、参りました。見栄はってました。  
道を訊かれてただけで本

清張作品の挿画を多数手掛けた、風間完氏の原画をもとに、デジタル技術を駆使してアニメ化した、これまでにないユニークな映像は、推理小説本来の面白さが味わえます。「点と線」は1階・推理劇場で上映中です。（上演時間約1時間）

## 北九州松本清張研究会

## 研究発表会

北九州松本清張研究会は、赤塚正幸北九州市立大学教授を代表に、北九州地域の研究者や学生が集う研究会です。昨年から地元ならではの研究として、共同で「半生の記」(初出「回想的自叙伝」)の注釈作業を始めています。7月12日の発表会はその第5回で、福岡教育大学助教授の久保田裕子氏が「彷徨」の章を担当、発表されました。

これまでの発表は下のとおりです。

## 第1回 「松本清張『半生の記』注釈のために」

H14.9.14 花田俊典(九州大学教授)



久保田裕子氏(左)

## 第2回 「奥う町」

H14.11.30 赤塚正幸(北九州市立大学教授)

## 第3回 「途上」

H15.2.1 石川巧(九州大学助教授)

## 第4回 「見習い時代」

H15.4.19 松本常彦(北九州市立大学助教授)



発表風景

## ・編集後記・

ようやく梅雨があけ、太陽が照りつける季節となりました。記念館も熱く燃えあがる時期です。

これまで以上に充実した館報をお届けしたいと考えています。よろしくお願いします。

(中野吉明)



イラスト:山藤草二

編集・発行

## 松本清張記念館

〒803-0813

北九州市小倉北区城内2番3号

TEL 093(582)2761

FAX 093(562)2303

<http://www.kid.ne.jp/seicho>

制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)  
小学生/200円(160円) ( )は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分  
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

## 松本清張研究会 第8回研究発表会

6月28日、松本清張研究会の「第8回研究発表会」が立教大学で開催されました。会員をはじめ、多数の友の会会員や一般の方など、約70名の参加者が盛況でした。



郷原宏氏

まず文芸評論家の郷原宏氏が、「日本推理小説史上における松本清張」と題し講演されました。自ら読者として、編集者、ミステリー評論家としての視点から、探偵小説を誰もが読める文学に高め、80年にわたる日本推理小説史に黄金期を築いた清張の功績と、本格派を含めた続く作家たちへの影響などを論じられました。

次いで、東京学芸大学助教授の大井田義彰氏が「愛しみの構図——松本清張の＜女＞を読む」と題して研究発表を行い、活発な質疑応答が交わされました。



発表する大井田義彰氏と会場風景

## 第6回

## 松本清張研究奨励事業募集

## 募集要項

- 対象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動  
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動  
(調査、研究等)

\*上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。

- 内容 入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。

- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容がわかる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成16年3月31日までに応募してください。

\*詳しくは記念館までお問い合わせください。

